

## 悲しき寮歌

今市病院 尾郷 賢



今市病院  
形成外科部長  
尾郷 賢

寮生活の1日はいつも寮歌の放吟で終わった。

5人1部屋という仕組みは協調性を培うといえ  
ば聞こえが良いが、付和雷同型の学生をも育てて  
いたようだ。

昭和33年4月、北大恵迪寮は定員のほかにもぐり  
入寮の学生も含めて300名を凌駕していた。1日  
の食費が3食で75円という哀れな生活だったが、  
学生たちは意気軒昂にして希望と熱気に満ちてい  
た。

夜9時頃、明日のバイト紹介が放送されると大  
勢がどっと寮務室に集まる。1日の肉体労働の報酬  
が250円から350円。市電を乗り換えて往復する  
と1日50円かかり、報酬の5分の1が消えた。い  
つもバイト希望者数が求人数を上回った。あぶれ  
た学生には、明日は学校に行くかそれともサボっ  
て寝坊するかの選択となる。早起き不要ならば酒  
盛り、という選択は当時の貧乏学生たちには無か  
った。

手持ち無沙汰の学生たちは必ず寮歌を歌い始める。酒などなくとも寮歌に酔えばいい  
のである。部屋の仲間や他の合流者たちの、調子っぱずれな歌声で夜が更けていった。

一番の愛唱歌はもちろん「都ぞ弥生」だ。明治45年度寮歌。横山芳介君作歌、赤木  
顕次君作曲。2人はいい寮歌を作りたいと、何年か留年してようやく完成したという。  
寮歌を作るために留年した例が他にもあるのか、私は知らない。通常は教養（当時は予  
科）の2年間しか在籍できない。彼らはこの寮歌を作っただけで寮生としての存在意  
義を十二分に示したことになる。一高の「ああ玉杯に」、三高の「紅燃ゆる」と並んで  
日本三大寮歌といわれている。

>都ぞ弥生の雲紫に 花の香漂ううたげのむしろ 尽きせぬ驕りに濃き紅や

>その春暮れては移ろう色の 夢こそ一時青き繁みに 燃えなむ吾が胸思いを載せて

>星影さやかに光れる北を 人の世の清き国ぞとあこがれぬ

この歌を歌いたくて北大に来た、と公言する学生が大勢居た。今も北大OBの胸を焦  
がす歌である。それにしても長い歌である。1番がこれだけあって5番まである。

「ああ玉杯に」や「紅燃ゆる」が7・5調の名調子であるのに対し、この歌は8・7調  
という変調である。他にも8・7調の名歌があるのか、私は知らない。

ある日寮のリーダーが、宴会を前にして「今日は久しぶりに正調都ぞ弥生を歌うぞ」  
といった。正調都ぞ弥生！ 初めて聞くがどんな都ぞ弥生だろう、と興味津々で聴いて  
いると、何とその歌は通常の数倍の時間をかけて歌うだけの都ぞ弥生だった。宴会の料  
理を前にして、歌とはいえないような、うなり声だけが続いているような、なんともあ  
ほらしい歌だった。どこが正調だ、あいつらはふざけているのだろう、それとも食事前  
の嫌がらせかとさえ思ったが、先輩たちは全員真面目な顔で歌っていた。

その後も何度か公式の場で正調の歌い方が出てきたが、私はこの歌い方が大嫌いだっ  
た。まるで歌になっていないばかりか、どこまで引き伸ばすのが正しいのか、個々の人

間は知らない。つまり、5 番までを 30 分で終わらせるのか、1 時間かあるいは 3 時間か、決まりがないのである。リーダーの調子に合わせて歌い継いでゆけななのだ。こんな歌い方はこの名曲の評判を落とす以外の何物でもないと残念に思った。

この歌い方の由来や重要性をいろんな先輩に尋ねたが、誰も満足の行く答えを持っていなかった。ただ、荘厳な式になるとこの歌が出るのだった。理由がわからないまま、これを歌うべきなのだ、という場があった。友人の結婚式でこれが出て、私もその 1 員として歌ったが、一般の参加者にはとても評判が悪かった。「こんな都ぞ弥生なんて聞いたことがない」とか「御詠歌みたいな寮歌」とばかにされた。

何とか「正調」の由来を知りたいものと、昔の楽譜を探したり、古いテープを聴いたりしてみた。だが、赤木顕次氏のオリジナル楽譜のみならず、古い時代の都ぞ弥生は現在のリズムとの微妙な違いはあるものの、テンポはほとんど変わらず、「いわゆる正調」の都ぞ弥生ではなかった。正調都ぞ弥生がとんでもない変調都ぞ弥生であることだけは確かだった。

いつの間にかそのことを忘れて数十年経った。昨年学部寮の同窓会が札幌であったとき、ある大先輩との会話で話題が赤木顕次氏に移って、さらに彼はふっと私に尋ねた。「都ぞ弥生を引き伸ばして歌う歌い方を知っていますか？」

「もちろん知っています。あの歌い方を私は大嫌いですよ。先輩はお好きですか？」

「いや、私だって好きではありません。しかし、あの歌い方が始まった理由には悲しい経緯があったのだそうですよ」

私は飛び上がりそうになった。なんと私が探しに探して見つけられなかった理由を、今ここで聞けるのだ、と思うと心臓が早鐘のように打ち出した。

「真相かどうかは分かりませんよ。ただ私が聞いたのは…」

戦時中寮生にも赤紙が来た。壮行会が終わってさあ駅まで皆で歩いて送ろう、というとき、当然のように都ぞ弥生を 5 番まで歌いながら歩こうとなった。駅まで歩いて 30 分弱、これを 5 番までの所要時間に合わせようとなったわけである。前述のように長い歌であるが、普通に歌えば 5 分程度で終わる。当然 1 番を 6 分間に引き伸ばして歌う計算がされた。初めは計算どおりに歌っていたが、駅に近づくにしたがって皆の足取りが遅くなり、どんどん引き伸ばしが長くなっていったという。

もちろん汽車の時間が決まっていたわけであり、無制限に引き伸ばしが可能なはずもない。また意識下のどこかで、いっそ汽車に遅れてくれれば、というはかない希望も働いたに違いない。

こんな悲しい道行きが何度か繰り返されて、いわゆる正調都ぞ弥生が定着したのだろう。定着したとはいえ、何十分かけて歌うのが本当の正調なのか決められなかった事情もよく分かる。そもそもこれを正調と名づける正当な理由付けがあったとはとても思われない。感情に流された勇み足というところだろうか。

こんな事情が分かっただけからは、私の「正調都ぞ弥生」に対する反感がずいぶん減じた。かつてあれほど忌み嫌った自分を反省もして居る。自分や友人に直接かかわる現実の重みを経験した者にのみ許される、あるいは理解できる複雑な感情のほとぼりであろう。時の流れに身をゆだねながらも、悲しい抵抗を試みた寮生たちへの共感と無常さが日に日に大きくなってゆく気がする。そして、戦争が終わってからもこの悲しい歌い方を後世に伝えなければ、とエネルギーを注いだ若者たちの執念が見えてくる。